

デュフィ展

27年春、待望の開催！

DUFI

RAOUL

DANS
TOUS
SES
ÉTATS



東京都美術館 東京・上野公園
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM



MAM MUSÉE
D'ART MODERNE
DE PARIS

Exhibition conceived by
the Musée d'Art Moderne de Paris,
Paris Musées

主催：東京都美術館、パリ市立近代美術館、パリ・ミュゼ、読売新聞社 展覧会公式サイト：<https://dufy2027.jp>

DANS TOUS SES ÉTATS

4.24^土 2027. — 8.22^日

・開館時間、休館日、入館方法等の情報は、確定次第、展覧会公式サイト等でお知らせします。・展示作品、会期、展示期間等については、今後の諸事情により変更する場合があります。最新情報は展覧会公式サイト等でご確認ください。

ラウル・デュフィ(1877~1953)は、「20世紀フランスを代表する、「色と光」の画家です。海、船、音楽、麦畑、田園風景など、穏やかで心地よい題材を、鮮やかな色彩で描いた作品を多数残しています。また、その創作はカンヴァスにとどまらず、テキスタイル、衣装デザイン、陶器、タペストリー、家具にまで及び、デュフィは多彩なアーティストとしても広く知られています。本展は作家の生誕150年を記念し、その全貌を、パリ市立近代美術館が所蔵する多数の作品を中心に紹介します。中でも、1937年のパリ万国博覧会のために制作された巨大フレスコ画『電気の精』の原画となる、10分の1スケールの貴重な絵画(幅6メートル)は必見です。2027年の春、華やかで明るい色彩が、東京・上野に広がります。

6メートルの大作！ パリ万博で制作されたフレスコ画『電気の精』の原画が来日！

『電気の精』
110cm×600cm



フレスコ画の展示風景(パリ市立近代美術館) ©Pierre Antoine

電気の精

ラウル・デュフィは、1937年パリ万国博覧会の「電気と光のパビリオン」のために、幅6メートルに及ぶ巨大なフレスコ画を制作しました。科学における電気の発見と応用の歴史をテーマとしたこの作品は、ニュートンやワット、オームなど、その歴史に名を刻む多くの科学者たちが、その功を称えるように描き込まれています。その鮮やかな色彩と光の表現は、電気という当時の最先端技術が、人々にとってまさに希望の灯であったことを今に伝えます。本作は、後に『電気の精』という愛称で親しまれ、1964年にパリ市に贈呈されました。現在はパリ市立近代美術館の専用展示室に設置され、来場者を包み込む壮麗な空間を創り出しています。技術的な見事さとモチーフの豊かさにおいて、『電気の精』はデュフィの芸術の集大成であると同時に、装飾芸術の最高峰の一つと言えるでしょう。

本展では、本作の貴重な原画(フレスコ画のモデルとなった、幅6メートルの作品)をはじめ、準備段階の素描や習作、さらに版画作品などもあわせて展示し、その魅力に多角的に迫ります。

← 6m →

《電気の精》 1937-38年 油彩/カンヴァス パリ市立近代美術館蔵

